

# 体育授業における教師行動と授業評価の関連について

## －大学生を対象とした体育授業における－

杉本 日和（大阪教育大学）

### 1. 目的

体育科教育学では、教師行動にかかわる研究が重要な研究領域として位置づけられ、これまで多くの研究が行われ効果的な教授方法が証明されてきた。高橋ら（1991）の研究により教師行動は、量的比重から「マネジメント」「直接的指導」「巡視」「相互作用」の4つの行動で構成されることが明らかとされた。その中でも教師の積極的な相互作用行動が学習成果の向上につながり、それは単元の中で個人内評価を強調する言葉がけがより効果的であると証明されている（長谷川 2004）。しかしこれらの研究ではどの年齢の学習者までこの教授法が有効であるのかの研究はされていない。年齢が上がるにつれ学習者ごとに競技経験の違いもでてくる。その中でより効果的な教授方法を明らかにすることを目的とした。

### 2. 方法

1) 対象：大阪教育大学 4 回生で開講されたハンドボールの体育実技（受講者数：小中保健体育、中等保健体育、スポーツ科学専攻の 51 名）。

2) 調査方法：高橋ら（1994）が作成した形成的評価をもとに学習者へのアンケート調査を実施。

3) 撮影方法：2 台の VTR を体育館に設置し授業風景を撮影し、後に ALT-PE を用いて教師行動の分析を行った。

4) 分析方法：SASUniversity Edition を用い、対応のある t 検定（ノンパラメトリック検定）、ノンパラメトリックな一元配置分散分析、因子分析を行った。有意水準は 5%未満（ $p < 0.05$ ）とした。

### 3. 結果と考察

#### 〈教師行動の実態〉

4 大教師行動のそれぞれの割合は、「マネジメント」11%「直接的指導」39%「巡視」14%「相互作用」10%であった。先行研究の結果と比較すると「マネジメント」「巡視」「相互作用」の割合は小さく、「直接的指導」の割合は大きな値になっている。またここでは 4 大教師行動には含まれない「補助的活動」が 21%と大きな値を示す結果となった。

#### 〈形成的学習評価との関連から〉

学習者による形成的評価と教師行動との関連から考察する。調査票の I の 10 項目を因子分析した。その結果①「楽しさ」②「学習意欲」③「成果」に分

類された。各 4 回の授業ごとにおけるそれぞれの因子の平均を比較してみると次の結果になった。（図 1）

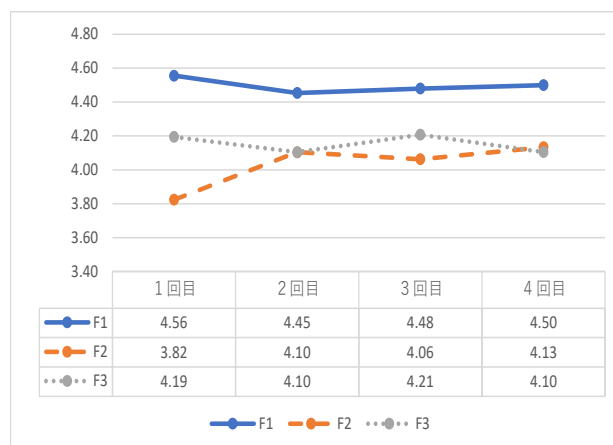


図 1 各因子の平均

次に調査票のⅡの 6 項目については各授業間で対応する項目ごとに対応のある t 検定を行った。まず 1 回目と 2 回目では 1 回目の方が評価が高かった。2 回目と 3 回目では 3 回目の方が高評価であり、各授業における教師行動の大きな違いは直接的指導と補助的活動の割合である。3 回目の授業において直接的指導の 20%以上の減少と補助的活動の急増が見られた。3 回目と 4 回目の授業では 4 回目の授業で個々に向けられる教師行動の割合が増える結果がでたが、授業間で有意差は見られなかった。以上のことから、学習者の授業評価を左右する要因の一つに直接的指導と補助的活動の割合があると考える。

#### 〈学習者の属性との関連から〉

最後に学習者の専門種目との関連についてノンパラメトリックな一元配置分散分析を用いて分析を行ったが、有意差がでたのは項目 2 のみであった。このことから、学習者の専門種目と授業評価には関連がないと想定できる。

### 4. 結論

本研究から大学生を対象とした場合、教師行動として直接的指導及び補助的活動の割合が評価に特に影響を与えることがわかった。しかし、その他の要因について明確な結果を得ることができなかった。したがって具体的な教師の発言内容や学習者の行動などの詳細な分析についての課題が残った。また、学習者の専門種目と教師行動には大きな関連はないことがわかった。